

パネルディスカッション

「魅力ある世界都市へのプロセスと課題」

》》 パネリスト 《《

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 青山 侑 氏 | 明治大学公共政策大学院 教授 |
| イエスパー・コール 氏 | ウィズダムツリージャパン株式会社 最高経営責任者 |
| 牧野 知弘 氏 | オラガ総研株式会社 代表取締役社長 |
| 吉本 光宏 | ニッセイ基礎研究所 研究理事 |

》》 コーディネーター 《《

- | | |
|--------|---------------------|
| 加藤 えり子 | ニッセイ基礎研究所 不動産運用調査室長 |
|--------|---------------------|

1——はじめに

■加藤 ニッセイ基礎研究所の加藤と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。それではパネルディスカッションに入りたいと思います。このパネルでは、魅力ある世界都市とは何か、そして訪日客4000万人を受け入れるにはどうしたらいいのか、そしてオリンピック・パラリンピックに向けて作りあげたものを2020年以降に向けてどう生かしていくのか、その取り組みについて皆さまのご見解を伺ってまいりたいと思います。

それでは、まずパネリストの皆さまをご紹介いたします。私の隣から、先ほど基調講演をしていただきました明治大学公共政策大学院教授の青山侑先生です。

■青山 青山です。よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 青山先生には、東京都で公共政策に携わられたご経験からお話を伺えればと思います。そのお隣がオラガ総研株式会社代表取締役社長の牧野知弘様です。

■牧野 牧野でございます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 牧野様は大手不動産会社やコンサルティング会社に在籍したご経験を生かして、空き家問題や都市問題、インバウンドに関する著作を発表しておられます。本日は2020年に向けて都市がどうあるべきか、幅広い視点からお話しいただければと思います。そのお隣が、ウイズダムツリージャパン株式会社最高経営責任者のイエスパー・コール様です。

■コール Hello、よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 コール様はアメリカ大手投資銀行でチーフストラテジストとしてご活躍されておりました。本日は、日本を拠点とされている外国人として、そして長く日本経済を分析されていた視点からご発言いただければと思っております。そして、向かって右側がニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏でございます。

■吉本 吉本です。どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 吉本は文化政策に関する調査研究や文化事業のコンサルティングに携わっております。オリンピックにおけるプログラムにも精通しておりますので、都市と文化の視点からコメントいただきたいと思ひます。

それでは早速、パネリストの皆さまから、それぞれのポスト2020に向けての視点からプレゼンテーションをお願ひしたいと思ひます。牧野様、まずお願ひいたします。

2——日本のインバウンド

■牧野 それでは私の方から、「ポスト2020、魅力ある世界都市」について、とりわけ今は日本全国のいろいろな都市に外国の方が増えてきていますので、訪日外国人の方々私たち日本人、あるいは日本の国がどういうふうに交わっていくのか、これからの日本の発展軸がどういったところにあるのかという点につきまして、簡単にご案内したいと思ひます。

今日は基調講演で、お隣の青山先生から、東京の今後の課題、あるいは魅力をどういうふうに出していくのかといったお話を拝聴いたしましたけれども、私も多くの不動産関係の仕事をしていまして常に感じるのは、都市の魅力あるいは都市の成長というものが、どうやら新陳代謝がきちんとできていることによって

生まれているということです。

つまり多くの人々が訪れたり住まったりする一方で、この都市からまた次の発展のステージを求めて出ていかれる方もいらっしゃいます。入ってくる人がいれば出ていく人もいます。この中で都市の魅力づくりができるのではないかと考えております。しかし、残念ながらわが国は、少子高齢化などと言われますけれども、青山先生の方からもご指摘いただいたとおり、人口の減少ばかりに目が行きがちです。しかし、実は東京の都市圏の中でも激しい高齢化の問題が避けて通れなくなっています。ポスト2020を考える中で、こんな課題があるわけです。

そんな中、この新陳代謝というキーワードについて考えると、私たちが東京の銀座や、ここの品川の通りを歩いているときによく目にする外国の方、お隣のコールさんなどもそうですけれども、こういった方々との連携、あるいは一緒にやっていくパワーが重要です。今日はそのことについて簡単にお話ししたいと思います。

皆さまご案内のとおり、訪日外国人の数は、当初の政府目標を2020年に2000万人としていたものが、昨年は既に1974万人でございます。今年も8月までの累計で既に、約2000万人だった昨年を25%ほど上回り、1600万人を超えてまいりました。こういった中で、政府は2020年の東京オリンピックの年に、訪日外国人を4000万人にしようという意欲的な目標を掲げました。

一方、日本の旅行者数、あるいは国際収支のデータを見ますと、日本から外国に出掛ける出国者の数を、外国から日本にやってくる入国者数（訪日外国人数）が上回るようになってきています。従って、国際旅行収支は、日本人が海外で使うお金に比べて、外国人が日本で使うお金が上回るようになりまして、昨年は久しぶりに1兆円を超える黒字という状況に相成っております。

今は海外のどんな国の方が日本を訪れているかという、皆さまご推察のとおりです。中国をはじめとした東アジア、あるいはタイ、シンガポール、マレーシアといった東南アジア、これらアジアの国々の人たちが訪日外国人の84%を占めています。

彼らの消費動向は、昨年で約3兆5000億円です。この急増ぶりはグラフで見ていただくと分かるのとおり、2011年の東日本大震災をボトムに5年連続で急速に成長しております。今年は若干、為替の影響であるとか、後ほど出てくるように爆買いが少し収まったことで、消費に対する先行きを懸念する声もありますが、訪日外国人数は冒頭でご案内したとおり、どんどん増えております。そういった意味では、GDP500兆円に対する割合はまだまだ低いものの、訪日外国人の消費の影響というのは、東京のみならず今は日本全国で垣間見られるようになっております。

このうち宿泊の需要はどのくらいあるかといいますと、約4分の1相当の9000億円が宿泊の消費額になります。そういった意味で今後、地方経済あるいは日本経済全体の中で、ホテル業界や観光業界、あるいは小売業界に対する影響は無視できないレベルに成長してきております。

2—1. 量から質へ

今、申し上げましたとおり、外国の方が日本で大量に爆買いするようなことで、メディア等で盛んに話題になったのは昨年です。今年の手百百貨店等の発表によりますと、この爆買いが若干下火になったというお話も聞かれますが、一方で多くの外国人が東京や大阪あるいは京都のみならず、地方に直接周遊に出るようになってきております。

最近、旅行会社の方とお話する機会があったのですが、中国から日本に来られるお客さまの人気のツアーを聞きました。今までは東京の銀座あるいは新宿、秋葉原などに行って、大量にブランド品や化粧品といったものを買っていた方々が、徐々にリピーターが増えてきて、日本のおいしいもの、あるいは良い土産品を求めて地方を周遊するようになってきたそうです。

最近の中国人旅行客の人気ツアーナンバーワンは田植えだそうです。中国にも田んぼがたくさんあるのではないかと私も思うのですが、日本で田んぼに行って田植えをしたいという体験型ツアーが人気なのは、私は仕事で上海などへよく行くのですが、上海は東京に引けも取らぬ大都会だからです。ここで育った若い方や子どもたちは、日本の農村に来て田植えを体験するのが誠に楽しいということで喜々として田んぼに入っています。このように、以前では考えられなかったような観光の仕方が出てきております。

それから、アジアの地区は、皆さま方もあまり想像がつきにくいと思うのですが、富裕層の方が大変増えてきております。こういった富裕層の方々が日本に2度目、3度目の観光をするとなると、しばらく滞在して日本を楽しもうという動きも出てきます。今はどうしても、アジアから来られるお客さまは1~2泊で帰ってしまわれる方が多いのですが、今言ったように、地方に行って田植えをしたり、あるいは日本の秘境に行ってみたいということになれば、宿泊日数もプラス1泊、2泊という感じで、最終的に消費額の増加につながったり、消費内容がより高度化したりする効果が期待できるわけです。

このように、ここ数年で急速にインバウンドが増えてきた日本ですが、世界的に見て日本のインバウンドの数がどのぐらいの位置にあるか、2014年のデータで世界順位を見ると、日本はまだまだインバウンドの後進国であります。2014年現在、外国人訪問者数は世界22番目です。ちなみにトップはフランスの8300万人超であります。アジアでは中国の5500万人、あるいは香港、マレーシア、タイといったところが日本よりも多くの観光客を集めています。

先ほどご案内しましたとおり、日本のインバウンドはアジアからが多く、欧米からは少ないというふうによく言われます。これは地政学的にアメリカやヨーロッパから日本に来づらからではないかと言う方もいらっしゃいますが、そんなことはありません。実はタイなどを調べますと、欧米からたくさんいらっしゃいます。隣にいらっしゃるコールさんがまだまだ普通でない人と思っていると、日本は駄目です。もっと欧米にとって魅力的な国になるためには、日本の観光資源であるとかインフラというものを、今後もっともっと整えてあげることが必要なのではないかと感じています。

今日の基調講演で青山先生からもご指摘いただいたとおり、羽田空港は滑走路が4本なのに鉄道が2本しかないというのは、目からうろこだったのですが、もっと外国人が旅行しやすい整備の仕方もあるのではないのでしょうか。

2-2. インバウンドの受け皿

インバウンドは2020年の東京五輪までではないかとおっしゃる方もいらっしゃいます。これも少し意見が違うのではないかと考えております。なぜなら、今は2000万人の外国人が東京にいらっしゃいますが、まだオリンピックは開かれておりません。さらに、これはJETROのデータなのですが、2020年に向けて中間所得層と呼ばれる教育やサービス、旅行にいそしむ方の人口が、中国では現在の3億人から6億人、ASEANでは1億人から1億8000万人に伸びるだろうと予想されています。

日本はだんだん高齢化してしまって、高齢化するとなかなか旅行してくれないという一方、少し目を移す

と私たちの国の外側では、日本に旅行できる方がたくさん増えてきているわけです。

そういった意味では、わが国では今後、MICEといわれるような会議場の施設であるとか、大型の観光施設を伴った大型の施設といったものを、東京あるいは大阪といった所にもっと整備する必要があるのではないかと考えております。

一方、これだけの数のお客さん、2020年で4000万人を受け入れることを考えれば考えるほど、羽田や成田、関空だけでなく地方空港が大きな威力を発揮してきます。実は日本国内に空港は97もございます。

今、この地方空港に外国から直接、飛行機がやってくるような仕掛けをすることによって、4000万人あるいは2030年の6000万人という目標をぜひ達成しようではありませんか。

一方、もう一つの玄関口が港であります。このパネルにありますとおり、大型の客船が日本に続々やってきました。昨年、クルーズ船によって日本にやってきた数は110万人を超えました。政府の目標では2020年に500万人を目指しております。

実は、クルーズ船は大変な威力を持っております。日本が誇る豪華客船の飛鳥IIはわずかに5万t、日本にやってくる最大の客船Queen Mary2はその3倍の15万t、2500人のお客さんが一斉に港に降りてきます。この方々は、1人当たり1回の寄港で3万~4万円をお使いになるそうですので、1回の寄港で何と1億円のお金を港に落とししていきます。現代の宝船といってよいのではないのでしょうか。

私は、こういった方々がこれから日本の地方で旅行されるときに有力な切り札になるのが民泊であろうと思っています。民泊は、都市で行う場合には既存のホテル・旅館との軋轢も多いのですが、逆に今、地方は大型の旅館あるいはホテルが代替わりできず、続々と廃業しています。

そんな中、日本の民家であるとか、空き家になってしまったところをどんどん民泊に利用して、外国の方でも気楽に地方の山奥や海のふちを訪れていただければ、こんな活用の仕方も考えられるのではないかと思います。

一方、日本では外国人留学生の方がますます増えています。

例えば別府の立命館アジア太平洋大学であるとか、秋田の国際教養大といった優秀なアジアの留学生をたくさん輩出している学校が出てきているので、日本で若者が少ないのであれば、どんどん外国から若者に来ていただいて、日本でもっと仕事をしてもらうような作戦も有効かと思っています。

2—3. 陸海空をゲートウェイに

さらに、中国、アジアのみならず、欧米からも富裕層を引き付けられるような超高級リゾートであるとか、日本は水面の多い国ですので、交通機関も例えば水上飛行機などを使って通勤で運んであげるといった発想も求められるわけでありませぬ。

日本は今までは大変恵まれた国でした。わが国の人口は戦後どんどん増え、1億人を超えました。そんな中、田中角栄さんではありませんが、新幹線、鉄道、高速道路といったものが日本の発展を支えてきました。

ところが、これからの日本が外国人を迎え入れようとするならば、これに加えて空である空港、海である港のゲートウェイを整備することによって、陸海空の三軍体制でわが国の第2の開国ともいべき外国の方々のゲートウェイを作ってみてはいかがでしょうか。

私が冒頭で申し上げたように、都市の活力は新陳代謝にあるので、陸海空を整備することによって外国

の方が大勢いらっしゃるようになり、日本全体の新陳代謝につながればと思って、私の最初のご提案とさせていただきます。ありがとうございました (拍手)。

■加藤 ありがとうございました。インバウンドのキーワードをさまざまな視点からビジュアルでお伝えいただきました。それではイエスパー・コール様、お願いいたします。

3—Beyond 2020

■コール よろしくお願ひします。コールと申します。私はドイツ人で、実は1985年からずっと日本にいますが、残念ながら日本語は難しいです。もし機会があれば赤ちょうちんに行ってお酒を飲むと、だんだんぺらぺらになるのですが、まだ多分、日本人の特に男性の耳には非常にづらい日本語で、大変恐縮です。

西洋人あるいは外国人の目から見て、なぜ日本のことが好きか、なぜ観光客は増えたのか。政治的なことやビザなどの規制緩和的なこと、あるいは円安や為替の関係など、いろいろ説明はできるのですが、もっと根本的な理由があります。カナダの有名なSF作家のウィリアム・ギブスンが、「未来を見たいのだったら東京へ行け」と言っています。これは非常に面白い言葉で、東京、いわゆる日本には将来に向けた発信力が非常にあるわけです。

今日のテーマは「ポスト2020」なのですが、予測できますか、どうですか。もちろん先生方に、日本人らしくて非常にきれいな都市計画を作っていたことは本当に感謝します。外国人の目からどう見ても、東京はすごい、素晴らしい街です。ニューヨークと比べると、あるいは上海と比べると、あるいは中南米にあるメキシコシティと比べると、東京は最高に住みやすいのですが、未来としては2020年の目標にオリピックがあるから、インフラ投資をもう一度しっかりやっていただければ間違いないと思います。

3—1. テクノロジーの進歩

でも、少し思い出していただきたいのです。全世界で今、人間の進歩の非常に大きな分岐点が起きているのではないですか。これはどういうことかということ、去年、囲碁でコンピューターが勝ったのはご存じのとおりで、人間のエボリューション、いろいろな進歩がありまして、人工知能(AI)やロボットについても、今、抜本的な進歩が進んでいます。今、AIはすごく大きな変化があり、Beyond 2020について考えると、どうしても技術革命を考えないといけないわけです。

「Global Mega Trends」、私はエコノミストなのですが、経済とテクノロジーのどちらが先か、そういう議論は赤ちょうちんで、楽しみにしています。

歴史は繰り返しますが、やはり技術革命のスピードアップはあるのではないかと。明治維新からIndustrial Revolution(技術革命)がありまして、文化改革あるいは富国強兵のキャッチアップが日本にはありました。そして、戦後には日本のものづくり、社会的にはサラリーマン文化、そして政治的には自民党の長期安定政権があったのですが、これも終わりました。

そして今はIT、インターネットのRevolutionが1995年ごろからスタートし、日本に平成デフレをもたらしたと同時に、人間と仕事の関係を根本的に変えました。安定雇用よりアルバイトの方が増え、政治的にも大きく変わったと思います。そしてこれからどうするかということについては、どうもテクノロジー、特にAIの進歩が大きな影響があります。

「Faster (より速くなること)」について考えていただきたいのですが、モバイル通信の速度は現在4Gです。東京五輪が開催される2020年までには5Gになるのですが、そのスピードアップは3万5000倍になってしまうわけです。

社会的な影響もあります。5000万人のユーザーになるまで、どのぐらい時間がかかったかを示すグラフを見ると、ラジオは38年間かかりました。テレビは13年間、iPodは4年間、FacebookやTwitterはさらにスピードアップしています。これによって社会はどうか、人間と人間の関係はどうか。そして、失礼ですが東京五輪のレガシーはショッピングセンターですか。それはある意味、あり得ないことです。

シンギュラリティ、技術的な進歩があると、いつかロボットやAIは本当に人間になるか、あるいは人間はロボットになるか、どちらになるか分からないのですが、このことについて少し考えていただきたいのです。

3—2. 日本のReality

そしてもう一つは、そういう技術的な進歩は、世界のどこでも起こっているのです。中国にも起こる、韓国にも起こる、ドイツにも起こる、アメリカにも起こる。そのときに差別化できるネタは何でしょうか。日本の一番強いところは何でしょうか。それは私の目から見てリアリティです。

私の目から見て、日本はもちろん技術的に非常に強いのですが、日本の強さはAIというより、感情知能、心の知能だと思います。おもてなしという言葉が最近よく使われているのですが、日本の強みは根本的にはものづくりより五感です。見る、聞く、かぐ、味わう、触る、それとたまに第六感の愛や関心なども入ってくるわけですが、やはりそれが東京の素晴らしいところです。

本当に東京は非常に素晴らしくて、五感に対しては何でもあります。よく言われるのですが、東京の高級レストランはパリよりミシュランの星をたくさん持っているのですが、東京の素晴らしいところは、まずい食がほとんどないことです。500円でも安全・安心でおいしいところがあります。だから、Beyond2020について考える場合には、間違いなくAIより感情知能や心の知能について考えていただきたいのです。それが、私の目から見て本当に日本のレガシーです。

技術的に競争力があるのは間違いなく日本です。ロボットやAIにおいて、日本は対国民所得比の技術開発費が世界のトップであり、日本企業は技術開発にたくさん投資しています。だから、やはりAIやロボットには競争力が間違いなくあります。

3—3. 人口減少に対する提案

一方、日本の悪いところは人口減少です。そこで、人口減少について、在日外国人として、一つ提案したいのです。

人口減少がある一方で、インバウンドの観光客は最近増えたと、よく説明していただくのですが、考えていただきたいのは、観光客は消費なのです。もしかしたら戻ってくるかもしれませんが、基本的には1回来てくれると終わりです。しかし、留学生あるいは労働力は、消費より投資なのです。ですから、移民の議論をどうしてもすべきなのです。ポスト2020の一つのレガシーとして、間違いなく移民のことが挙げられます。

どういうことかという、私はドイツ人、あなたたちは日本人です。ドイツ人と日本人はどこが同じかという

と、やはり職人文化です。きちんと仕事をします。今日からすぐに先生になれるわけではなくて、時間がかかります。きちんと真面目に教えてくれる先輩・後輩の関係があって、ご存じのとおりドイツにはマイスター制があります。高校を卒業して、職人の指導を受けながら仕事をし、週末には学校に行きます。そして3~4年後にはライセンスをきちんと取れるというのがマイスター制の根本です。

これは日本の移民政策にどういう関係があるかという点、アジアから労働力が入ってきて、建設業とか、トラックの運転手などに就くときに、きちんとした教育を施す日本型マイスター制が必要だということです。2~3年間、日本の先生、日本の会社で仕事をして、きちんと勉強して、きちんとライセンスを取って自国に戻ったときに、日本からのマイスター制を頂いたところはずごく役に立つことは間違いなくて、インドネシアに戻ってくれば、日本型マイスター制があると銀行がお金を貸してくれることがあるのではないかと思います。

だから労働政策、移民政策については、一方通行ではなく、外から入ってきたときにどうするかということなのです。出口については自国に戻るとききちんとした日本型マイスター制の免許があれば、間違いなく合理的になるのではないかと思います。

私の目から見て、素晴らしい日本において、どうしても外国の労働力を使わないといけないのは事実なのです。伸びている産業は、ほとんどサービス産業です。日本らしいサービス産業は人間と人間のコミュニケーションなのですが、ロボットやAIはおもてなしサービスは絶対にできません。だから日本の教育でそのような構造をつくっていただければ、ポスト2020の本当のレガシーになるのではないかと思います。すみません、ありがとうございます(拍手)。

■加藤 ありがとうございます。日本人がまだ気付いていないような日本の良さというところもご指摘いただいたかと思います。それでは吉本さん、お願いいたします。

4——アートから東京2020とその先を考える

■吉本 青山先生の基調講演の最後の方にもございましたけれども、私は文化・アートからポスト2020を考えるとということでお話しさせていただきます。

4—1. オリンピックと文化

といいますのは、オリンピック・パラリンピックというのはスポーツだけではなく、実は文化の祭典でもあるからです。

オリンピックの理念を定めたオリンピック憲章の根本原則の第1には、「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と明記されています。

そして、近代五輪の祖といわれるクーベルタン男爵は、こんな言葉を残しているのです。「オリンピックとは、スポーツと芸術の結婚である」と。

実際に100年以上前のストックホルム大会から、文化プログラムは行われてきました。当初は五つの芸術分野でメダルを競い合う競技の形で行われていたのですが、それが1952年に芸術展示という形に変わって、1964年の東京大会でも美術や芸能の10分野で、さまざまな展覧会や公演が行われました。

そして1992年のバルセロナ大会以降は、前の大会が終了した年から毎年、文化フェスティバルを開催す

るという4年間の文化プログラムが定着しました。そして、2012年のロンドン大会でかつてない規模の文化プログラムが行われて、大成功を収めたといわれております。

そしてつい先日、終わったばかりのリオ大会なのですけれども、残念ながらリオでは文化プログラムは大変低調でした。それは今日お手元にお配りしたレポートに書いてありますので、ご興味があればお読みいただければと思います。

ですので、2020年の東京大会でどんな文化プログラムが行われるのか、世界が注目しているわけです。

4—2. ロンドン大会の文化プログラムの実績

大成功したロンドンの例をご紹介したいと思います。この英国の地図はガイドブックの最初の方に出ているのですが、一つ目の大きな特徴は、ロンドンだけでなく、イギリス全土で行われたということです。

開催概要は、ご覧のとおりですけれども、4年間で12万件の文化イベントが行われ、4000万人以上が参加しました。そして、下から数行目のところにあるのがすごく重要なポイントだと私は思っています。イギリスの大会ですからイギリスの文化を世界に発信することはもちろん行ったわけです。けれども彼らは、アスリートと同じ204の国と地域からアーティストを招いて、オリンピックというチャンスを世界中のアーティストに提供しました。ですから、わずかに数名しかアスリートの参加しない国からも、彼らはアーティストを招いたわけです。

そして大会の年に行われたフェスティバルでは、「一生に一度きり」というスローガンが掲げられました。一生に一度きりの文化的な体験を提供しよう、アーティストには一生に一度きり、オリンピックがなければできないような作品を作ってもらおうというスローガンです。

具体例を幾つかご紹介します。フェスティバルの事業は、ここにありますように六つの特徴があるといわれています。

これは実際に私が見たものなのですが、ロンドンの繁華街の一つであるストラッドフォードストリートで、パークハウスというショッピングセンターのショーウィンドーを使って写真展が行われました。写真展のタイトルは、「The World in London」というものです。ロンドンは一説によると300以上の言語が話されています。それぐらい世界中から移民を受け入れているのです。ですので、3年かけて、ここでも204の国と地域からロンドンにやってきた移民のポートレートを撮って写真展をしようということが行われました。

3年間かけても、モデルになってくれる移民が見つからない国がありました。小さくて恐縮ですが、スライドの下の方に白抜きの人型のポスターがあります。これはマーシャル諸島 (MHL) からの移民が見つからなかったため、ポスターに何と書いてあるかといいますと、「Are you from Marshall Islands?」と書いてあるわけです。「もしあなたがマーシャル諸島から来た方なら、ここに電話してください。そうしたら、ここにあなたの写真を展示します」と書いてあります。

この写真展はヴィクトリア・パークでも行われて、日本人を探したら、いました。JPNと書かれているのですが、写真の下には小さなQRコードがありまして、それをスマートフォンで読み込みますと、この写真展を企画したフォトグラファーズ・ギャラリーのホームページに行きます。この方はHisako Ikedaさんということがわかり、なぜロンドンに来たかが書かれていて、彼女の声で聞くこともできます。世界中からアスリートがやって来るオリンピックに合わせた優れた企画だったと思います。

パラリンピックに関連して、「UNLIMITED」という障害のあるアーティストによる大規模なフェスティバ

ルが行われました。そのアイコンになったのが、スー・オースティンというアーティストです。

彼女は足が悪いのですが、パフォーマンスをしています。それで、水中でパフォーマンスをするという挑戦をしたわけです。車椅子で水中に潜るのは大変危険なのですが、逆に体重が軽く感じて自由に体を動かさず。そこで特別な車椅子を開発して、このような美しい海で踊って、それを映像作品として残しました。

オリンピックが終わった後、彼女は空中でのパフォーマンスにもチャレンジして、車いすにパラグライダーを付けてパフォーマンスを行っています。そして、彼女の将来の目標は宇宙でパフォーマンスをすることです。もう既にNASAと交渉を始めているというふうに伺いました。

オリンピックのときに、障害のあるアーティストの創造力の可能性が無限大であることを表現し、それをオリンピックが終わった後も追求し続けているというのがスーさんの取り組みです。

次に、ちょっと面白い「Tate Blackout」というイベントをご紹介します。Tateというのはロンドンにある世界最大規模の現代美術館で、発電所を改修したものなのですが、そこでオラファー・エリアソンがLittle Sunというプロジェクトを発表しました。

Tate Blackoutということで、大会中の毎週土曜日の夜10時に美術館のあらゆる照明を消します。そして、これはオラファー・エリアソンが技術者と開発したLittle Sunという太陽電池の照明器具の作品なのですが、これを使って真っ暗な美術館の中をポスターをたどって進むと、真っ暗なギャラリーにたどり着いて、このライトでTateのコレクションを見るという催しでした。

それだけであれば、少し変わった展示ということになるのですが、ここに書いてあるようにLittle Sunは5時間の充電でライトが5時間と持ち、3年の寿命があります。環境にも経済的にも素晴らしいということがうたわれています。

彼は何を考えたかといいますと、ここに16億という数字がありますが、16億とは地球上で電力供給を受けていない人たちの数です。オラファー・エリアソンはロンドン大会でこれを発表して、その16億人の人たちにLittle Sunすなわち「小さな太陽」を届けたいというプロジェクトをスタートさせたわけです。

実際に目標が左側に書かれていまして、2012年に25万人、2013年に50万人、東京大会が行われる2020年には5000万人にこれを届けるという壮大な構想を、彼はロンドンで発表したのです。

そして実際にどのように使われているかが、映像でアップされています。それを見ますと、小さな家で家族がこのライトと一緒に食事をしていたり、子どもがこのランプで勉強したりといった様子を見ることができます。

このプロジェクトは地球環境問題であるとか、経済格差であるとか、そうした社会的な課題にアーティストがアプローチする、チャレンジするという壮大なプロジェクトなのですが、それがロンドン大会で始まったということです。

最後にもう一つ、これは私が大変印象に残っている「HATWALK」というプロジェクトです。ロンドン市内にはたくさんの彫像があります。イギリスの歴史を代表する彫像21体を選んで、帽子をかぶせるというプロジェクトです。

これはトラファルガースクエアにあるネルソン提督の彫刻なのですが、高い円柱の上にあります。何と52mの高さがあります。52mの彫刻にどう帽子をかぶせるか。これは当時のロンドン市長のボリス・ジョンソンの肝いりで行われたのですが、ロンドン市の文化局の皆さんは頭を悩ませました。そして、イギリス国内

に2台だけ、この高さに届くクレーンがあることを発見し、夜中に全部通行止めにして、クレーンでこの帽子をかぶせました。

この帽子のデザインはユニオンジャックとトーチがモチーフになっていますけれども、私が一番しゃれていると思うのは、これをデザインしたのはロック&カンパニーという世界最古の帽子屋さんで、その帽子屋さんは、200年以上前にネルソン提督が実際にかぶった帽子を作ったところだということです。

帽子というのはイギリス王室に代表されるように、イギリスの代表的な文化の一つだと思いますけれども、こういうフューチャリスティックなデザインの帽子もあれば、こんな帽子もあったということです。この帽子は1週間から10日展示された後、また52mのクレーンを担ぎ出して撤去して、一定期間展示されてオークションが行われ、その収入も文化イベントに使われました。

ロンドンの主催した文化プログラムの短い映像があるので、ご覧ください。これはロンドン市庁舎の外壁で、ある日突然行われたダンスパフォーマンスです。こんなことが東京で果たしてできるだろうかと私は思います。

それから、これはビッグダンスという参加型のダンスイベントです。車椅子に乗ったままでも踊れるということで、イギリス全土で行われました。

そして、これがHATWALKの帽子をかぶせるシーンです。52mのクレーンでの設置の様子です。

そして、これは「ピカデリーサーカス・サーカス」といって、1945年の戦勝パレード以来初めて、ピカデリーサーカスを通行止めにして朝から晩までサーカスが行われました。そのフィナーレでは、空中から1.5トンの羽毛が振りまかれ、ロンドン市民は熱狂しました。

日本ではほとんど紹介されませんでした。ロンドン五輪のときにはこんなことが行われていたわけです。